は亜種 (4) に帰せられるが、亜種名はなるべく使わぬ方がよい。勿論日本産のうち (1) 又は (2) の色相のものが散発的に見出されてもこれを亜種とはみとめられない。最近黒田 (51) が *R. tanezumi* に同定した 1 標本の記載は *R. rattus* でない証拠は何もないし、かかる野鼠が個体群として東北地方の一角に存在するとは考えられない。*R. norvegicus* は *R. rattus* より交流がはげしいので世界的に確認された亜種はない。日本の家屋性甘日鼠も *M. musculus* の 1 亜種とみる方が妥当であるが、その亜種名はよくわからない。家鼠個体群が野外を棲息地とした場合これを野鼠と呼ぶべきではなく、野外個体群というのが妥当である。〔高知女子大動物〕

アブラコウモリのハエに依る飼育 斎藤 豊

Saito, Y.: Studies on the rearing of bats, *Pipistrellus abramus*, by flies

アブラコウモリを実験動物として取扱うには実験室内に於ける人工飼育が不可欠なる要項であるので、前回は 1 種の混合スリエに依り或程度その目的が達せられることを述べたが、今回はガラスのハエトリビンにて多種多量のハエ類を屋外にて採集し、之と水とでその飼育を試み更に良結果を得たが、その成績は次の如くであつた。1. 春期捕獲コウモリはその飼育が不可能である。2. 夏期のものはその 80~100% に飼育可能である。3. 初秋及び中秋捕獲せしものは夫々 75% 及び 20% に於いて飼育可能であつた。4. 食欲は夏期最も旺盛で向秋に従い減少し 12°C 以下では食餌を摂取しない。5. 飼育に当り体重は秋 11 月最高に達し冬期間は冬眠に移行し漸次その減少を来す。〔新大細菌〕

昆虫の殺虫剤に対する反応時間に関する研究 金光正次・長谷川 恩

Kanemitsu, M. & Hasegawa, M.:
Studies on the reaction time of
insects to various insecticides
〔札幌医大衛生〕

宮城県桃生郡宮戸村(松島湾宮戸島)における衛生害虫調査 その 2, 蠅の棲息状況特に便所並びに肥料溜の場合 加藤陸奥雄・渡辺清綱

Kato, M. & Watanabe, K.: Research works on insects of medical importance at Miyato Isl., Matsushima Bay, Miyagi Prefecture II Larval habitats of flies special reference to toilet pool and cess pool

1953 年 6 月から 1954 年 2 月までの間、毎月末松島湾口宮戸島の蠅の幼虫の棲息状態を調査し、便池並びに肥料溜における蠅の生態について興味ある結果を得た。1. 肥料溜は蠅の第一次的な発生源とはならないようである。肥料溜に棲息する蠅の幼虫は、もつぱら第一次発生源と見られる便池において発生したもので、単に持ちこみによるものと考えられ、従つて肥料溜はいわば第二次発生源といった性格をもつものと思われる。2. 農漁村における便池は相当に大きく従つて尿尿は便池で古いものから新しいものへの一つの傾斜構造をかたち造っている。この構造に伴つてウジの棲み分けがみられる。3. 上記と同様の現象が肥料溜にもみられる。即ち分解度の少ない肥料溜においてはウジは十分に生育しているが、分解の進むに従つて、ウジの生育は困難となつて死亡個体を生じ、液化すると全く生育不能となる。4. このような現象と指標として測定した pH との間に密接な関係がある。pH が 7 乃至それよりわずかに多い間はウジは生育するが、8 前後になると死亡する。液化すると pH は再び 7 に近づくが、ウジの生育はみられない。この本質については更に追究の必要がある。5. 一つの肥料溜においても、その層状構造の点で、上にのべたと全く同じような現象がみとめられる。

〔東北大生物・塩釜保健所〕

京都地方の蠅の研究〔VI〕昭和 28 年度に於ける蠅の季節的消長 渡辺 清

Watanabe, K.: Study on the flies in Kyoto (VI) Seasonal prevalence of flies during 1953

採集方法: 鼠の屍体を誘引物とせる金網製トラップ。
採集場所: 京都府立 医大校庭。採集日時: 自 1953 年 1 月, 至 1953 年 12 月。

結果 1953 年度に於て捕獲せし総蠅数は 16,388 匹, こ